

『歴史総合，世界史探究』

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前文

令和8年度の共通テストにおける歴史科目は、「歴史総合」『歴史総合，日本史探究』『歴史総合，世界史探究』の2科目・1出題範囲が用意された。そのうち、『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」第1問と『歴史総合，世界史探究』の第1問とが共通であった。よって、『歴史総合，世界史探究』においては，主に第2問以降について意見・評価を行うこととする。第1問については，『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の項目を参照いただきたい。

また，『歴史総合，世界史探究』の追・再試験においては，本試験の前文で言及した受験者数や平均点等についての分析は避け，出題方針，内容及び難易度等について考察する。なお，評価に当たっては，報告書（本試験）15ページに記載の8項目により，総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

(1) 評価の観点

設問形式	令和8年度	
	出題数	(出題率)
主に知識・技能を評価するもの	19	(79.2 %)
主に思考・判断を評価するもの	5	(20.8 %)
合計	24	(100.0 %)
(うち概念的理解)	2	(8.3 %)

* 知識・技能を評価する問題と思考・判断を評価する問題の分類は，当外部評価分科会の判断による。

(2) 分野別の出題数・出題率

分野	令和8年度	
	出題数	(出題率)
政治史	9	(37.5 %)
社会経済史	5	(20.8 %)
文化史	3	(12.5 %)
複数分野に関わる	7	(29.2 %)
合計	24	(100.0 %)

(3) 時代別の出題数・出題率

時代	令和8年度	
	出題数	(出題率)
古代史	4	(16.7 %)
中世史	6	(25.0 %)
近世史	3	(12.5 %)
近代史	4	(16.7 %)
現代史	0	(0.0 %)
[うち戦後史]	0	(0.0 %)
複数時代混合	7	(29.2 %)
合計	24	(100.0 %)

* 中世(5c～14c)，近世(15c～17c)，近代(18c～19c)，現代(20c～)を判断の目安とする。

* (1)～(4)については，「世界史探究」部分(第2問～第5問)のみ。

* 第1問については，「歴史総合」部分を参照のこと。

(4) 地域別の出題数・出題率

地域	令和8年度	
	出題数	(出題率)
西欧・北米	9	(37.5 %)
東欧・ロシア	0	(0.0 %)
東・内陸アジア	3	(12.5 %)
南・東南アジア	4	(16.7 %)
西アジア・アフリカ	1	(4.2 %)
中南米・オセアニア	2	(8.3 %)
複数地域に関わる	5	(20.8 %)
合計	24	(100.0 %)

第1問 『地理総合／歴史総合／公共』の「歴史総合」の第1問と同じ。

第2問 時代による建築物や都市空間の持つ意味や利用方法の変化について

問1 下線部④の出来事と，文Ⅰ・Ⅱとについて，古いものから年代順に正しく配列したものを
選択する問題。下線部④，文Ⅰ・Ⅱから中国における宗教の変遷について思考力・判断力・表
現力等を問う問題。

問2 パネルにある「敵」について述べた文と定州の位置とについて，最も適当なものの組合せ
を選択する問題。パネル内の「澶淵の盟」の記載から，「敵」がキタイ(契丹)を建国した遼
であることを推測させ，遼についての知識・技能を問う問題。地図の使い方に工夫がみられる
良問である。

問3 下線部⑥の背景と会話文中の空欄「ア」の人物の事績について述べた文について、最も適切なものの組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問4 資料に記述されている事件の政治的背景について、最も適切な文を選択する問題。知識・技能を問う問題。資料は、カノッサの屈辱後も教皇グレゴリウス7世とドイツ王の対立が継続していたことを示すものであり、教皇権と皇帝権の関係性の本質について問うような問題にすると、思考力・判断力・表現力等を問う問題になり得た点が惜しい。

問5 会話文中の空欄「イ」の都市名と空欄「ウ」の文明の説明とについて、最も適切なものの組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問6 トラテロコ広場がある国について述べた文について、最も適切なものを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う問題。選択肢あ、いについては、この広場がある国に関して、図4や会話文の内容を踏まえて判断する選択肢とした。また、選択肢うは図4からメキシコの歴史を推察するものであるのに対し、選択肢えはメキシコの独立運動の特徴とガーナの独立の類似について類推するものであり、判断の際の思考方法が異なる。選択肢えの文章も「三文化広場」による過去の表象の仕方に関連付けた内容にすると図4を生かすことになり、過去の歴史を記憶として表象するという優れたテーマを伝えるより良い問題になり得た。

第3問 人物や時代、出来事の評価や解釈の変容について

問1 文章中の空欄「ア」に入る文と空欄「イ」に関して述べた文とについて、最も適切なものの組合せを選択する問題。思考力・判断力・表現力等を問う問題。通常は、ソフィストと対置されるソクラテスらに対して、資料と対話文から異なる評価に気付かせる良問。

問2 民主政期のアテネで起こった出来事について述べた文の正誤の組合せとして正しいものを選択する問題。知識・技能を問う問題。寡頭政や民主政期の女性の政治参加についての知識を問う。

問3 ペトラルカとヴォルテールについて述べた文として最も適切なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。ペトラルカやヴォルテールが自身の時代と対比させて中世という時代に低い評価を与えた理由を資料から推察させたり、12世紀ルネサンスのように中世の文化的繁栄に関する資料を提示し、ペトラルカらの中世に対する時代観と比較させたりするような問題にすると、思考力・判断力・表現力等を問う問題になる可能性があった。

問4 課題と課題を考察するための事例とについて、最も適切なものの組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。事例の4つが中世の政治や経済、文化を示す文で統一されており、中世ヨーロッパ世界の包括的知識を問う良問である。

問5 下線部⑥について述べた文として誤っているものを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問6 メモの正誤について述べた文として最も適切なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。資料2からインド大反乱に関する新たな解釈を得ることで、概念的理解に到達することができる良問である。

第4問 世界史上における知識や情報の伝播について

問1 会話文中の空欄「ア」に入る人物について述べた文として最も適切なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。長距離移動に関わった人物に関する正命題で選択肢が構成されている。

問2 会話文中の空欄「イ」に入る文と地図上のトゥワイジンの埋葬地との最も適切なものの組合せについて問う問題。知識・技能を問う問題。ニジェール川中流域に位置するトンブクトゥが繁栄した要因を問う問題にすると、受験者の学習の動機付けになり得たのではないかと。

問3 資料で紹介されている戦争の背景や経緯について述べた文として最も適切なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。資料3を用いて、スペイン継承戦争についての包括的知識を

問う問題。

問4 会話文中の空欄「ウ」に入る語とその活動について述べた文とについて、最も適当なものの組合せを選択する問題。活動のX、Yの文が正命題であるのに対し、Zは誤命題である点が惜しい。X、Y、Zの文をヨーロッパのキリスト教修道会に関する正命題にして、イエズス会に当てはまるものを選択させるか、三つのうち一つのみを正命題とするかにすれば、測定したい認知が明確になり、より良い知識・技能を問う問題になり得た。

問5 パネルから読み取れることについて述べた文として最も適当なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問6 パネル中の空欄「エ」に入る語句の具体的な事例として最も適当なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問7 調査のための課題として最も適当なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。更なる調査のための課題について選択する問題であるが、歴史的事象の正誤判断になってしまっている点が惜まれる。

第5問 経済活動と社会の変化について

問1 ノート1中の空欄「ア」に入る写真と空欄「イ」に入る文とについて、最も適当なものの組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問2 図1、図2及びノート2の内容やその背景について述べた文として、正しいものの組合せを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問3 ノート3とグラフから読み取れる事柄や、そこから考えられることについて述べた文として最も適当なものを選択する問題。知識・技能を問う問題。なぜ生地を縫い目をリベット（締め釘）で補強する必要があったのか、なぜ藍で染めたのか、なぜ厚手のコットン生地を用いたのか等を探究する文脈を設定し、当時、どのような人々がストラウス社の製造したブルージーンズを着用したのかを、19世紀後半のアメリカの情勢と結び付けて考察させる問題にすれば、思考力・判断力・表現力等も問えるような、受験者の関心をひくテーマであった。

問4 パネル中の空欄「ウ」に入る港市の名と空欄「エ」に入る文との組合せとして正しいものを選択する問題。知識・技能を問う問題。

問5 スライドの事例から読み取れる内容と各班がまとめた内容とどのように類似しているかについて述べた文として最も適当なものを選択する問題。スライドの内容から、16世紀の東欧が西欧の後背地となり、農奴制が強化された結果、コサックの反乱が生じたことを抽象化して、4つの班の発表内容との類似性を探る思考力・判断力・表現力等を問う良問。

3 分量・程度

分量は、5つの大問で構成されており、各大問5～8問、全32問が出題され、資料を丁寧に読ませ深く考察させようとする意図が感じられる試験時間に見合った適切なものであった。また、大学入学希望者の学力を問うものとしては、適正な難易度であった。歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察し、概念的に理解しているかを問う問題も出題されていた。

まず、知識・技能を問う良問として2問取り上げる。「10」は、パネル中の「敵」に関して文章や図2から知識を用いて推察するとともに、「敵」が図2中の燕雲十六州を支配していたという知識を用いて、「敵」を眺望することができる場所を推し量る思考を問う問題となっている。知識を問う問題と知識を用いて思考する問題を組み合わせた良問である。また、「20」は、インド大反乱に関して教科書による通説とは異なる側面について取り上げた問題であった。資料2からは、身分・職業や信仰による違いを超えたインドの人々の関係が示され、インド大反乱を「独立戦争」と

表記することで、「突発的な反乱」に対するオルタナティブとして「計画的な独立戦争」という特徴が与えられている。受験者は、問題を解きながら「インド大反乱」の「独立戦争」としての新たな側面に気付くことができる良問である。

思考力・判断力・表現力等を問う良問としては2問取り上げる。15は、ソクラテスの人物像とペロポネソス戦争の内容を想起する問題である。上記の20と同様に、歴史の教科書の叙述とは異なる、ソクラテスとその弟子たちの一般的な評価に対するオルタナティブを資料から読み取らせる問題となっており、受験者の既有知識を覆すことで思考につなげている工夫がみられる。18は「中世」という言葉の意味のつくられ方に関して、課題と課題を考察するための事例を結び付ける問題である。会話文とノートから、ペトラルカとヴォルテールの持っていた中世に対するイメージについて読み取らせ、その後両者が「知的な暗さ」「混乱し、貧しい」と評価する中世に対して、別の側面をあぶりだすための事例を結び付ける問題である。4つの事例が、カロリング=ルネサンス、王権を抑制する貴族、ヨーロッパにおける皇帝の位置付け、そしてヨーロッパ世界の商業の発展という中世ヨーロッパ史に象徴的な事象で構成されており、中世ヨーロッパに関する包括的知識を問う優れた思考問題である。「中世」という時代区分をどのように捉えるのかを、根拠から導く問題とも考えられる。

4 表現・形式

今年度の問題では、全体を通して、文字資料、統計資料、地図、図版資料など様々な資料が提示されていた。しかし、単に資料の読み取りにとどまる問題もみられた。例えば、25では、パネルとパネル内のグラフから読み取れる情報のみで正誤判断できる選択肢がみられた。選択肢①は、パネルから小説の発表時期を、グラフから英領インドの電信網の長さを読み取ることができ、容易に判断することができる。また、選択肢③の正誤を判断するためには、インド帝国の成立時期を知識として持つておく必要があった。28や29では、資料やノート、図の内容が言い換えられているのみの文で選択肢が構成されていた。30では、グラフが提示されているが、選択肢②の判断のためにはフロンティアの消滅の年代を知識として持つておく必要があり、上記25と同じように年号の知識が必要とされた。単なる読み取りの技能を測定する問題や、受験者にとって因果関係が明確でないためグラフと歴史的な事象を結び付けることが難しく、結局年号の知識に依存せざるを得ない問題には注意深くありたい。

また、問題の測定対象が混線しているため、評価したい認知が不明瞭な問題が見られた。例えば、13では、XとYの文は正命題でありアステカ文明とインカ文明のどちらかを判断するための思考が働くが、Zは誤命題でラテンアメリカ文明全体の特徴を把握するのに必要な知識を判断に要し、前者2つとは異なる思考で判断する必要がある。24でも同様に、X、Yは正命題である一方で、Zは誤命題であり、判断に必要な推論過程が異なる。26の選択肢も同様に、選択肢②と③は空欄Iと関連性の誤りを見抜く問題になっている一方で、選択肢④は事実的知識の誤りを見抜く問題になっている。つまり、空欄Iの理解を問うことなく選択肢④の誤りを判断させる問題となっている。

27は「さらなる調査のための課題」として最も適当なものを選択する問題であり、世界史探究の求める学習風景が意図されていた。選択肢の文が疑問文の形式で統一される工夫がみられるが、試験という性格上、結局、事実的知識の正誤判断になっている部分が残念である。例えば、ある歴史的な事象について調査する際に、自身がよって立つ視座や枠組み、探究の射程範囲と限界、先行研究を通じた課題設定など、大学における研究作法ともつながるような内容について問うことも可能であろう。最終問題である32は、生徒たちの諸発表における類似を問う問題となっており、あ

る歴史的事象と類似している事象を問う問題は，本試験や昨年度の試験も含め多くみられる。20世紀の歴史家マルク・ブロックが，社会の同種現象を体系的に対照し共通点と差異から原因を抽出して歴史的因果を説明したように，本来であれば単に二つの歴史的事象の類似を見出すことで終わらずに，なぜ類似しているのかを問う点に歴史を学ぶことの醍醐味があると考えられる。歴史の学習者が，歴史を類推のベースにして現代の問題の原因を多面的に分析したり，問題に対する解決法の選択肢を増やしたりする思考につながるからである。近年の問題は，受験者にとって興味深いテーマを設定しているため，その素材を生かしながら，歴史を学ぶ意義が伝わるような作問を願っている。

5 まとめ（総括的な評価）

これまでの出題でも様々な工夫が行われてきたが，今年度の出題でも，学習の文脈を設定し，知識を再構成することで包括的知識や概念的理解に至る問題がみられた。また，課題として最も適当なものを選ばせたり，生徒たちがまとめた内容の類似を探ったりと，世界史探究としての新たな問題の試みへの挑戦もみられた。

また，第3問で人物や時代，出来事の評価や解釈の変容をテーマとして取り上げたように，歴史学で歴史認識をめぐる議論になっている話題を取り上げて，受験者の既有知識を揺さぶるような資料を提示して問題に答えさせる問題もみられた。このように，受験者が新たな歴史の語りを構成していくような問題のデザインにはこれからも期待したい。一方で，選択肢の作り方については，問題を通じて受験者に引き起こしたい認知過程を明確にして，その過程を測定するための観察手法としての問題のあり方について，引き続き工夫をしていただきたい。

最後に，問題作成委員の皆様にご心より感謝を申し上げたい。委員の皆様が作成された問題は，かつての知識偏重の歴史教育に対するオルタナティブとして，資料の読解や比較，因果関係の把握を受験者に促す工夫がみられる。今後も，受験者や歴史教員に世界史の知的興奮を与える問題作成に期待を申し上げる。